

鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1) 2020年度版

1-1 基本事項
1-2 その他

§1 一般事項

1. 使用材料、工法等は構造特記仕様書による。
2. 設計図書に記載なき場合は本標準図に従うものとする。
また本標準図に明記なき場合は構造特記仕様書 1-2-4 に指定した共通仕様書及び日本建築学会「JASS5(2018)」及び「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説」による。
3. 本標準図は異形鉄筋を対象とし、dは呼び名に用いた数値とする。
4. 本標準図に示す単位は特記なき限りすべてmmとする。

§2 共通事項

鉄筋の表示記号及び最外径は下表による。

記号	×	∅	○	⊗	⊕	⊘					
呼び径 d	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32	D35	D38	D41
最外径 D	11	14	18	21	25	28	33	36	40	43	46

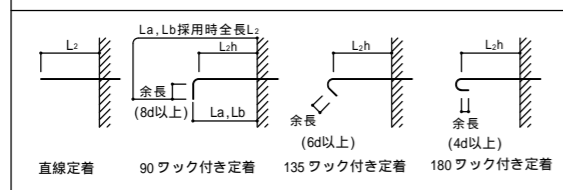
- フックのない場合
- フックのある場合
- 本数に差がある場合
- 機械式継手表示
- ガス圧接、溶接継手表示

柱・梁・基礎の主筋、及び、その他の鉄筋の折曲げ形状・寸法

折曲げ角度	図	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折曲げ内法直径(D)
180°		柱・梁主筋	SD295	D16以下	3d以上
		基礎主筋	SD345	D19~D41	4d以上
		あばら筋	SD390	D41以下	5d以上
		スパイラル筋			
		スラブ筋			
		壁筋	SD490	D25以下	5d以上
				D29~D41	6d以上

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 (N/mm ²)	重ね継手の長さ	定着の長さ			
			一般		小梁・床スラブ	
SD295 SD345 (¹)はSD345を示す	18	45d(50d)	40d	上段直線 L ₁	15d	
		35d	30d, 20d	上端筋	(20d)	
	21	40d(45d)	35d	下段 L ₂	L ₁ =20d L ₂ =10d	
		30d	25d, 15(20)d	下段 L ₂		
	24~27	35d(40d)	30d(35d)	下段 L ₂	15d	
		30d	25d(30d)	下段 L ₂		
30~36	35d	30d	下段 L ₂	床スラブの場合 L ₁ =10d かつ		
	25d	20d, 15d	下段 L ₂			
39~45	30d(35d)	25d(30d)	下段 L ₂	150以上		
	20d(25d)	15d(20d), 15d	下段 L ₂			
48~60	30d	25d	下段 L ₂	SD490 は適用外		
	20d	15d, 15d	下段 L ₂			
SD390 (SD490) (¹)は適用外	21	50d(-)	40d(-)	上段直線 L ₁	20d	
		35d(-)	30d(-), 20d(-)	上端筋	(-)	
	24~27	45d(55d)	40d(45d)	下段 L ₂	15d	
		35d(45d)	30d(35d), 20(25)d	下段 L ₂		
	30~36	40d(50d)	35d(40d)	下段 L ₂	(-)	
		30d(35d)	25d(30d), 20(25)d	下段 L ₂		
39~45	40d(45d)	35d(40d)	下段 L ₂	(-)		
	30d(35d)	25d(30d), 15(20)d	下段 L ₂			
48~60	35d(40d)	30d(35d)	下段 L ₂	(-)		
	25d(30d)	20d(25d), 15(20)d	下段 L ₂			

一般定着の直線L₁またはフック付きのL_{1h}, L₂, L_{2h}の図

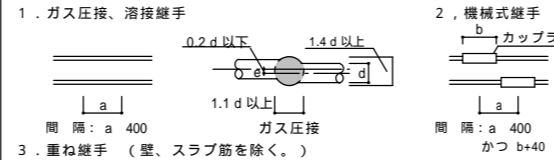


1. 重ね継手の長さは鉄筋の折曲げ起点間の距離、又、フック付きのL_{1h}は仕口面から鉄筋の折曲げ起点までとし、末端のフックは定着長さに含まない。
2. 軽量コンクリートを使用する場合は、2-3の数値に5dを加算する。

2-4 継手一般

3. 構造特記仕様書2-2で令第73条を選択した場合、主筋又は耐力壁の鉄筋の継手重ね長さは左下表L₁かつ40d(軽量コンクリートを使用する場合は50d)とする。
4. 構造特記仕様書2-2でJASS5(2018)、RC規準2018とした場合、主筋又は、耐力壁の鉄筋の継手重ね長さは設計図によるが、参考値として左下表JASS5(2018)にL₁を示す。

ガス圧接継手・溶接継手・機械式継手に関する事項は、標準仕様書および施工要領ならびに鉄筋継手工事特記仕様書(2019年版)共に公益社団法人日本鉄筋継手協会編に準拠。



1. ガス圧接、溶接継手
2. 機械式継手
3. 重ね継手(壁、スラブ筋を除く。)
4. D35以上の鉄筋は原則として重ね継手は用いない。(ガス圧接、溶接、機械式継手等による)
5. 溶接継手及び機械式継手の場合はメーカー仕様による。

- 下記の1.~7.に示す鉄筋の末端部にはフックをつける。
- 1. あばら筋及び帯筋
- 2. 煙突の鉄筋
- 3. 柱及び梁(基礎梁を除く)の出隅部分の鉄筋(下図参照)



4. 片持ちスラブの上端筋の先端
5. 最上階及びこれに準ずる箇所の柱頭の四隅の鉄筋
6. 杭基礎の基礎筋(偏心基礎及び杭2本打以上の場合)
7. 鉄筋柱の脚部の基礎柱、又は根巻コンクリートの四隅の鉄筋

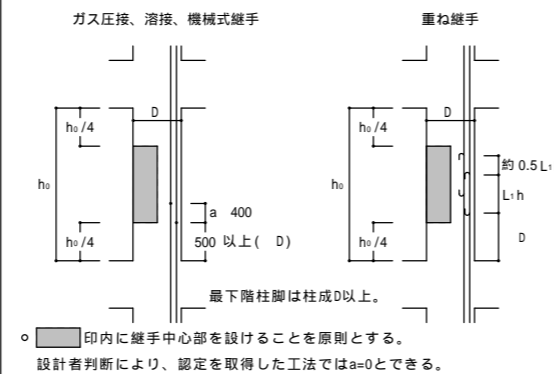
- 鉄筋のあきaは原則として下記による。呼び名の数値dの1.5倍以上
- 粗骨材の最大寸法の1.25倍以上
- 鉄筋径が異なる場合は大きい方による。
- 二段筋のあきは1.5dとする。

- 鉄筋に対するコンクリートの設計かぶり厚さと最小かぶり厚さ

部 位	かぶり厚さ	
	仕上げあり	仕上げなし
土に接しない部分	屋根スラブ	30(20)
	床スラブ	30(20)
	非耐力壁	40(30)
	柱	40(30)
土に接する部分	耐力壁	50(40)
	基礎・擁壁	70(60)

1. ()内の数値は最小かぶり厚さを示す。
2. 仕上げありとは、鉄筋の耐久性上有効な仕上げのある場合とする。
3. 1 品質・施工法に応じ、工事監督者の承認で10減の値とすることができる。
4. 2 軽量コンクリートの場合は、これに10加算する。
5. 柱・梁の主筋のかぶり厚さは主筋径の1.5倍以上とする。

§3 柱



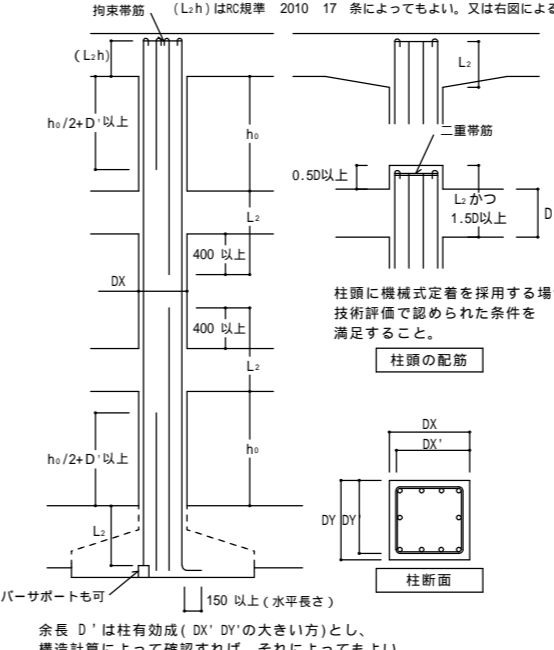
3-1 主筋の継手

3-2 主筋の定着

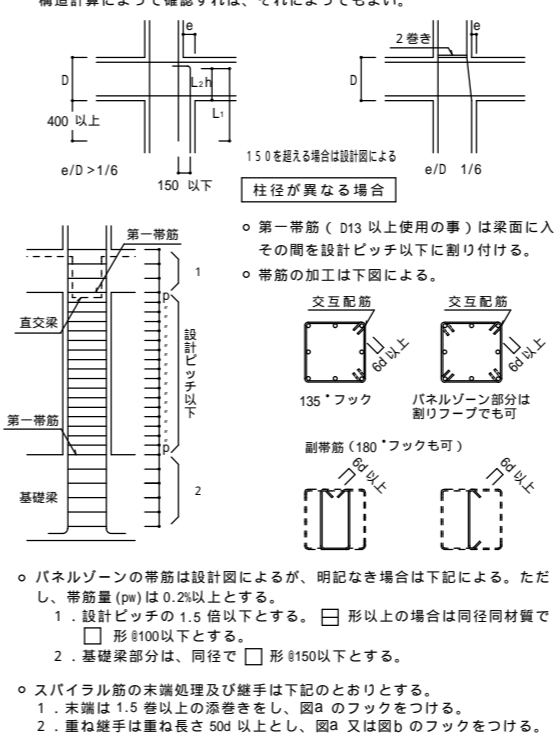
3-3 帯筋副帯筋

3-4 補助筋

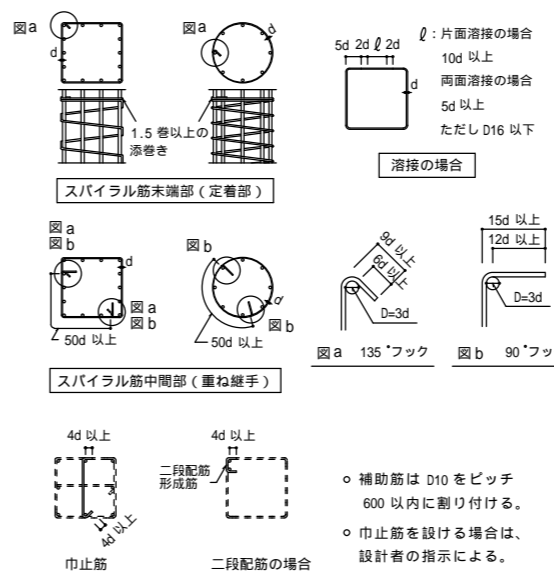
3-2 主筋の定着



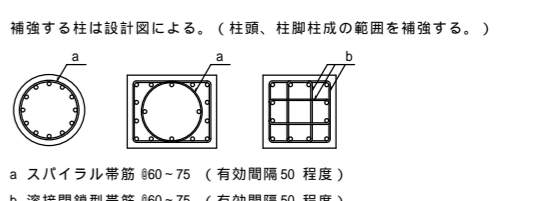
3-3 帯筋副帯筋



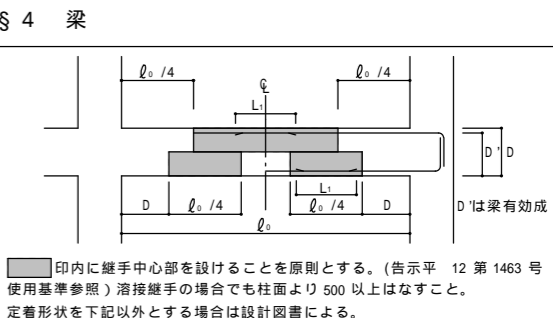
3-4 補助筋



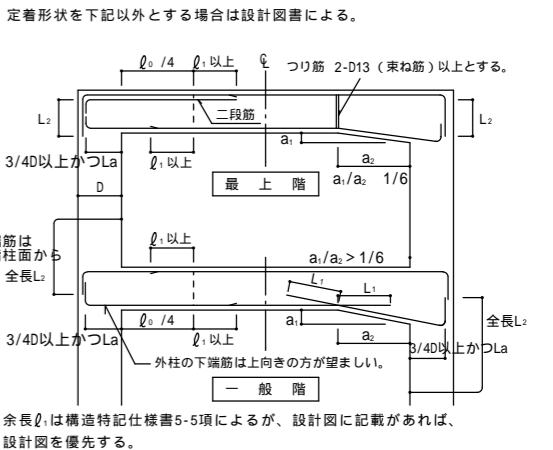
3-5 柱のコンファインド補強



4-1 主筋の継手



4-2 主筋の定着及び余長



外柱

中柱

4-3 あばら筋副あばら筋

